

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	趙 泰 昊
主 論 文 題 名： Crossing Borders, Negotiating Identities: The Literary Function of Saracen Hybridity in Middle English Romances (越境する他者：中英語ロマンスにおけるサラセンのハイブリディティ)				
(内容の要旨) 中世キリスト教世界において「サラセン」という呼称で表されるイスラム教徒は、同時代のキリスト教徒にとって重大な脅威となる他者であった。この事実を反映するかのように、異教徒との対立を主題とする中世の物語に登場するサラセンの多くは、キリスト教徒とは明確に異なる存在として、醜悪な姿で描き出されている。一方で、古仏語で書かれた最古の武勲詩『ロランの歌』では既に、怪物的なサラセンに加え、キリスト教徒同様に美しい外貌と美徳を備えたサラセンの騎士が描き出されている。異なる神々を信仰するという宗教上の差異によって明確な「他者」として区別されるはずのサラセンであるが、こうした同質性もまたその表象を構成する主要な要素として存在しているのである。本論文はこの「他者性と同質性の混合 (hybridity)」をサラセン表象の本質として位置づけながら、後期中世のイングランドにおいて高い人気を誇った「中英語ロマンス」と呼ばれる物語群に登場するサラセンの表象を分析する。13世紀から15世紀にかけて作られた複数の物語を対象とした横断的な分析を通して、このサラセン特有のハイブリッドな性質が、物語中の登場人物による様々な「越境」を可能としていることが明らかになる。この分析の結果は同時に、こうした物語中におけるサラセンの役割が、現実世界の読者による「自己と他者の境」を定義するための想像に貢献しているという可能性をも示唆している。 キリスト教が支配的であった中世ヨーロッパにおいて描かれたイスラムの表象を対象とする研究の歴史は長く、20世紀前半には既に古仏語で書かれた武勲詩やラテン語の年代記に登場するサラセンの表象に対する綿密な分析がなされている。特に1960年代のNorman DanielやR. W. Southernらの研究は現在もその有用性を失ってはいない。主に中世の英語やフランス語で書かれた作品を対象とするこれらの中世研究は、様々なタイプのサラセン表象を採集し、物語中のその役割を分析するものであった一方、近年の中世研究では、Edward Saidの『オリエンタリズム』やポストコロニアル理論の見地を取り入れながら、宗教的・人種的他者として描かれるサラセン表象に新たな視点から考察を加えている。中でも21世紀以降に発表されたGeraldine Heng、Siobhain Bly Calkin、Jeffrey Jerome Cohen、Suzanne Conklin Akbariといった中世学者による研				

究は、中英語文学作品に現れる人種の形成や国家意識の表れを扱いながら、サラセン表象の重要性を明らかにする重要な試みである。

近年の研究ではこのように中世ヨーロッパ世界の国際政治や異文化間交流、人種観の形成など、様々な領域においてサラセン表象の持つ重要性が注目されているものの、先行研究の多くは物語におけるサラセンの役割を「異質」か「同質」の一方に振り分けながらその意義を論じている。Amy Burgeの研究のように、サラセンの **hybridity** に注目した研究も存在するものの、サラセンの二つの側面の同時存在の価値と役割を議論した研究は未だ十分ではないと言える。本研究ではこうした先行研究の成果を踏まえながらも、サラセン表象のこの二律背反的な性質が同時に存在することが持つ物語中の機能を明らかにしている。

中世史家の Caroline Walker Bynum が定義するように、‘**hybrid**’ とは二つの異なる性質が同時に存在する状態であり、二者間で生じる安易な同化や変化に抗うものである。実際に、他者性と同質性を同時に備えるサラセン表象はこの意味でもハイブリッドな存在であると言える。本論文におけるそれぞれの物語に対する分析が明らかとするように、サラセンがキリスト教に改宗する際にも、異教徒としての他者性は完全に消え去ることはない。物語においてこうした登場人物たちは常に完全な同化を目指す闘争に身を投じる必要がある。言い換えれば、「同化を目指す他者としての努力」は物語に描かれるサラセンの性質と密接に結びついていると言える。

本論文は、分析の対象となるサラセン表象の役割と物語の性質によって三章に分かれている。ここで分析されるそれぞれの物語は、こうしたサラセン表象の持つ特性を異なる方法で活用しながら、自己と他者を区分する境界を再定義している。サラセンのこのハイブリッドな性質は、自己と他者の二項対立を成す要素を同時に物語中に持ち込みながら、様々な文脈においてその両者の間の境界の再定義を試みているのである。

第一章では、中英語で書かれたシャルルマーニュの武勲を題材とする物語群（フランスもの）において、サラセンの騎士の改宗が果たす役割について分析を試みている。ハイブリッドな性質は物語中に登場するサラセンに共有される主要な性格である一方、この側面を顕著に示すのは、後にキリスト教へと改宗するサラセンの騎士たちの存在である。キリスト教徒の働きによって改宗を決意する異教徒たちの存在は、キリスト教の正しさと勝利を証明するものである一方で、こうした非キリスト教徒の「宗教的な他者」としての出自は、彼らを新たに受け入れる集団の成員たちからの疑いを招くことになる。物語において改宗するサラセンの騎士たちは、「古い信仰を捨て、洗礼を受ける」という決定にもかかわらず、キリスト教徒からの疑いに身を晒すことになるのである。こう

した中で自身の同化を完遂するために、サラセンの騎士たちは新たに獲得した「キリスト教徒としての自我」を真正なものとして証明すべく、不断の努力を課されることになる。通常、物語においてこの証明は、元の仲間であるサラセンたちを相手とする、キリスト教徒を守るための戦闘を通して行われる。この過程でサラセンの騎士たちは、怪物的なサラセンによって示される「かつての自分の姿」と現在の自らを明確に異なるものとして示すための「他者化 (othering)」を試みるのである。この個人のアイデンティティを証明するための戦いは同時に、キリスト教徒とサラセンの二つの集団間の違いをも再定義する結果をもたらす。言い換えれば、サラセンの騎士の同化をめぐるプロセスは、集団としての自己と他者の境界を引き直す性質を持つと言える。こうした物語の展開は、対外的にはスコットランドやフランスなどの外敵に対して **English** として明確に自らを定義し直し、国内では異端や道を踏み外したキリスト教徒の脅威と直面していた後期中世のイングランドにおいて、様々な社会背景において受容されている。

中英語で書かれたシャルルマーニュの物語のうち、サラセンの騎士の改宗を題材にしたものはそれぞれの主人公の名を冠する「**Otuel** の物語」、「**Ferumbras** の物語」に大別される。現存する三つの **Otuel** 物語では、キリスト教徒の騎士 **Roland** との戦闘における聖霊の導きによって、サラセンの騎士 **Otuel** はキリスト教への改宗を決意する。彼の決意は神の奇跡によるものであったにも関わらず、他のキリスト教徒たちのその後の振る舞いは、**Otuel** の同化がこの時点では不完全であることを示している。キリスト教徒としての自己を証明する **Otuel** の試みを象徴的に示すのは、サラセンの王 **Clarel** との戦闘であり、この戦いにおいて **Otuel** は敵である **Clarel** の顔を剣で打ちつけ、「犬のように歯を剥き出した姿」に変えている。‘**heathen hound**’ (「異教徒の狗」) といった言葉が示すように、サラセンは伝統的に犬のイメージによって描き出される存在であり、**Otuel** は見目麗しいサラセンの騎士を典型的な怪物として「他者化」しているのである。**Otuel** によるキリスト教徒としての自らを証明するための戦いは同時に、外部の他者からは区分される「新たな成員を迎えたキリスト教徒の共同体」の再定義に繋がっている。こうした物語の展開は、**Calkin** などの研究者によって指摘されるように、歴史的に密接な関係を持つ周辺地域の外敵に対する、同時代イングランドのナショナリズムの高まりを反映しているものとして考えることができるのである。

もう一つの改宗譚である **Ferumbras** の物語も同様に、サラセンの騎士がキリスト教共同体への同化を目指す物語として読むことができる。15世紀ごろに編纂されたと考えられる *Sultan of Babylon* の中では、キリスト教徒とサラセンの間に従来期待される「正邪の絶対的な区分」は見られず、物語の初めから彼我の境は相対化された曖昧なもの

して提示されている。こうした中で、有徳の騎士である **Ferumbras** の改宗はより慎重に行われることになる。物語は **Ferumbras** の忠実さに繰り返し言及しており、彼の改宗の決断を正当化するような描写が強調される。一方で、後に聖人になると語られるこの騎士が、「洗礼後も元の名前で呼ばれ続けた (1479-86)」という物語中の一節は、サラセンの騎士の同化に伴う困難や、その他者性が完全に取り除かれることはないという事実を端的に示すものとなっている。この中英語の物語では **Ferumbras** 自身を、キリスト教徒ですら実現し得ない理想を体現する人物として描き出しており、キリスト教世界への同化を目指す彼の努力によって、より完全なものになるキリスト教共同体の姿を描き出している。この物語における理想的なキリスト教世界の団結は、15世紀におけるイスラム勢力の脅威と、キリスト教国の団結の必要の高まりを反映したものとして理解される。

こうした分析は、これらのロマンスにおけるサラセンの騎士の同化が、それぞれの作品が作成された時代の背景に応じて、国家や宗教的共同体といった様々な集団の再定義のために用いられていたということを示唆してくれる。フランスの英雄であるシャルルマーニュの物語は中世イングランドにおいて、百年戦争などの英仏間の対立の激化や国内における異端の登場、国際政治における協力の要請など、様々な歴史的文脈の中で繰り返し再話されていたのである。

隣国であるフランスやスコットランドなど、具体的な外部の他者に対して自己を定義する目的のためにサラセンが描き出されることがある一方、このサラセンの持つハイブリッドな性質は信仰における内的な他者性を表現するのにも活用されている。第二章では、**Andrea Hopkins** によって‘penitential romance’と定義される「罪を犯したキリスト教徒の改悛を描いた物語群」のうち、*Sir Gowther* と *Robert of Cisyle* の二つの作品に注目し、これらの物語が罪深いキリスト教徒の墮落と救済を伝統的なサラセンの表象を用いて描き出しているということを指摘した。

Sir Gowther の主人公 **Gowther** は人と悪魔の間に生まれた半人半魔の存在 (ハイブリッド) であり、父親である悪魔から受け継いだ彼の悪魔的な性質は他のキリスト教徒に対する暴虐からも明らかとなる。それらの特徴は、同じく「悪魔の子孫」と称されるサラセンの表象と共通するものであり、キリスト教徒として洗礼を受けた後にも非道を続ける **Gowther** の姿は、「悪魔的な他者」としてのサラセンのイメージを用いることでより詳細に描き出されている。物語はこの悪魔的な騎士の改悛を主題とするが、救済へと向かう **Gowther** の様子もまた、サラセンの改宗において用いられるモチーフによって描かれている。自らの罪を悔いた **Gowther** は、**Otuel** や **Ferumbras** 同様にサラセン人を

相手とするキリスト教徒を守るための戦闘に従事し、自らの悪行に対する罰として犬に囲まれながら生活を送る。「異教徒の狗」はサラセンと密接に結びついたイメージであり、ここで *Gowther* の罪と改悛はサラセン的な表象をもって描き出されている。邪悪な罪人としてのサラセン像と、改宗するサラセンの騎士のイメージが、このロマンスにおける罪人の改悛をより印象的に描き出しているのである。言い換えればこのロマンスは、罪深い他者でありながら、その同化が望まれるサラセンのハイブリッドな性質を、罪深いキリスト教徒が救済される過程を物語るために適用しているということを示している。

もう一つの‘penitential romance’である *Robert of Cisyle* では、悪魔の血筋ではなく、神への信心を忘れた主人公の傲慢さが物語の契機となる。この物語においても *Sir Gowther* 同様、犬を伴侶として過ごす罪人の姿が描かれるなど、サラセンと結びついたモチーフが登場する。一方で、本論文で扱われる他のロマンス群とは異なり、この物語には明確にサラセンが登場する場面はない。加えて、サラセンの表象がユダヤ人などの他の異教徒と描写を共有していることから、このロマンスの主人公である罪深き王 *Robert* の描写を単純に「サラセン的」として断ずることは、一見すると困難である。しかし、本章における分析は、物語と関わるいくつかの点（物語冒頭のサラセンへの言及、*Robert* の同伴者である猿とサラセンの結びつき、改宗の対象としてのサラセンの性質、同じ写本に収録された作品の種類）によって、この王の改悛の描写がサラセン的であるという可能性を明らかにしている。ソロモン王の物語を土台としたこのロマンスは、直接の描写がない物語であるものの、サラセンのモチーフが比喩的に罪人（他者）の同化を描く際に用いられているという例を示してくれている。

物語におけるサラセンの改宗を分析の出発点とした前二章とは異なり、第三章では様々な地域を旅する商人のイメージに注目し、中英語ロマンスに登場するサラセンの商人がどのような役割を与えられているかを分析する。中世ヨーロッパ世界において、地中海は東西のキリスト教世界とイスラム教世界を結ぶ重要な交易路であり、そこでは異なる宗教的アイデンティティをもった商人が交流していた。地中海世界を舞台とする中英語ロマンスにおいても同様に、サラセンの商人がキリスト教徒と交流している様子が描かれている。この章で扱う *Octavian* と *Floris and Blancheflur* の二つのロマンスは、このようなサラセンの商人のモチーフを中心に据えた物語であり、様々な境界を超える商人のイメージをそれぞれの目的に沿って活用している。

Octavian において皇帝の息子である二人の主人公 *Florent* と *Octavian* は、幼少期に

生き別れとなり、異なる環境で育つことになる。Octavian が高貴な身分として育てられる一方で、双子の兄弟である Florent は商人階級の Clement に育てられる。双子の主人公が置かれたそれぞれの環境の違いから、Harriet Hudson や John Simons などの研究者はこのロマンスは中産階級と貴族階級の価値観の対立を描いたものであると指摘している。一方で、物語において暗示される商人とサラセンが共通して持つ「越境する」という特性に注目すると、この物語が階級区分の流動的な性質と、階級間の理想的な協力関係を描いた物語であるということが明らかとなる。Florent の養父である商人 Clement は、サラセンの言葉を用いてサラセン人に扮する能力の持ち主であり、高貴な出自であるはずの Florent もまた、この養父によく似た性質を示している。物語において中心的な役割を果たす Florent の冒険もこうしたサラセンと商人のイメージによって彩られているのである。更に、商人に育てられた Florent が後に騎士として本来の高貴な身分を取り戻す際にもサラセンの騎士の改宗と同様のモチーフが用いられており、流動的な商人階級とサラセンの結びつきが強化されている。このロマンスは、キリスト教社会における階級間の関係性を再定義するために、サラセン商人のイメージが援用されている例を示してくれる。

中世ヨーロッパに広く伝播していた物語を元に作られた中英語ロマンス *Floris and Blancheflur* はサラセンの王子とキリスト教徒の女性の恋を描いた物語である。「排除されるべき他者としての異教徒」とは対極のサラセン像を描くこの物語は、しばしば異なる宗教間の融和を描いた牧歌的な作品として理解されてきた。しかし、John A. Geck が指摘するように、現存する 4 点の中英語版においては主人公である二人の信仰の区分は極めて曖昧なものになっており、Auchinleck 写本を除く三つの写本では物語結末部のサラセンの王子の改宗の場面が欠落している。このように中英語版では、宗教間の違いが曖昧なものとして描き出されているものの、これは物語の基盤をなしていた「宗教の違い」が消し去られたということの意味するのではない。このセクションでは、他者性と同質性を併せ持つサラセンのイメージが、異なるアイデンティティ間の違いを相対化し、その関係をより「寛容な」ものとして想像するために用いられているという点を指摘している。こうした目的のため、このロマンスにおいてもサラセン商人のイメージが用いられている。その典型例となるのは、中英語版において登場する主人公 Floris が旅する商人として変装する場面である。ここでは信仰の曖昧さに加えて、異なるアイデンティティ間の交流を可能にする商人の性質が用いられている。戦時中でさえも異なる集団の間を行き来していた商人のイメージの活用は、異なるアイデンティティ間の平和的な交渉を描く際に、サラセン商人の持つハイブリッドな性質が用いられていた例として理解することができる。この恋物語の牧歌的な雰囲気は、この物語の根幹をなす「異な

る宗教間の恋物語」という主題の削除によるものではなく、サラセン表象に内在する同質性と他者性の混合によって成立しているのである。

中英語ロマンスにおけるサラセンは中世キリスト教世界における典型的な他者でありながら、その同化を期待されるような同質性を備えたハイブリッドな他者として想像されている。それぞれの物語においてこの他者性と同質性の同時存在は、特定の集団に属する成員と異質な他者との間の境界を再定義するために利用されている。Phillipa Hardman が示唆するように、中世のロマンスが常に個人や集団のアイデンティティの探求を志向するものであるとするのであれば、こうした機能を持つサラセンは、物語を彩る装飾ではなく、むしろこのロマンスという物語群を特徴づけるような、重要なモチーフの一つであるといえるのである。

Thesis Abstract

No. 2

recuperation of each sinner, their hybridity allowing this potential redemption.

Chapter Three takes into account another form of border-crossing movement by Saracens through their association with a specific social class: travelling merchants. This chapter mainly deals with two Middle English romances which center on merchant figures who confront and interact with Christians and Saracens: *Octavian* and *Floris and Blancheflur*. These two romances contrast Saracen merchants with their monstrous Saracen othered relatives, providing a ground for narrating not only the potential for social climbing of an individual merchant but also the opportunity for acts of transition and mingling with others, without any need to exclude these figures through violence.

The analysis of each aspect of the portrayal of Saracens across several English romances will prove that medieval romances were able to exploit the ambivalent hybridity of their nature, their unique range and freedom, as a way to define various identities according to each context.

